

双日総合研究所副所長・チーフエコノミスト

吉崎達彦

民主主義の成熟見せた

台湾総統選

二〇一二年に予定されている大型選挙のうち、先陣を切って台湾総統選挙が行われた。結果は馬英九總統の再選。

民進黨の蔡英文候補の得票は六%差で及ばなかった。

昨年一二月下旬、筆者は選挙戦取材のために台北市を訪れてみた。すでに市内の至るところに選挙看板が目につき、街頭演説車も走り回っていた。国民党本部は建物全体を巨大な看板と化し、「台湾加油」というスローガンを掲げていた。いわば「がんばろう日本」の台湾版である。しかも「加油」にひっかけて、馬英九總統がガソリンスタンドの店員に扮していた。エリート臭を批判された四年前とは大違いで、くだけた形でサービースに努めている。

民進黨本部は、パチンコ屋のような音を立てて小銭の集計を急いでいた。「志作人」(ボランティア)のバッジをつけた担当者に聞いたところ、全島の支持者から二〇万個の

よしざき たつひこ

一九六〇年生まれ。八四年一橋大学卒業、日商岩井入社。米フルッキングス研究所客員研究員、経済同友会代表幹事秘書・調査役などを経て企業エコノミストに。著書に「一九八五年」「オバマは世界を救えるか」など。ウェブサイトを「溜池通信」を主宰。

「ぶたの貯金箱」が寄せられたとのこと。資金力で劣る分を、小口献金で補う作戦である。

しかし四年前に目撃した選挙戦とはどこか調子が違う。はたと気づいたのは、「国民党は青、民進黨は緑」という従来のパターンが消えていたことだ。

国民党は青と赤と白の組み合わせで、まるで米大統領選挙のようであった。建国一〇〇周年を記念して、市内の至る所に青天白日旗が掲げているのだが、その旗の色合いを利用している。政府イベントとコラボするかのようだ。

民進黨側は、「台湾ネクスト」と書いた黄色の矢印をシンボルマークに使っていた。緑を使わないのは、「緑」独立派「陳水扁時代」のイメージから距離を置くためである。陳水扁前總統は汚職問題で今も刑事被告人の身であるし、無党派派を取り込むためには独立色を薄くしたほうがいい

い。ちょうど「鳩山・菅時代への反省から、慎重運転に努める野田首相」と重なって見えた。

「青か、緑か」という選択は、もともとは「統一か、独立か」を意味していた。だが、今となつては大陸との統一を望む人はほとんどおらず、かといって独立を求めることにも疲れてしまい、民意の八割は「現状維持」を求めている。米国で民主党と共和党の対立が深まっているのとは対照的に、台湾の二大政党は中道化路線を展開している。

考えてみれば、民主的な総統選は今回で五度目である。回数を重ねるにつれて、「前回は〇〇党だったが、今度は××党」という有権者（スウィング・ポーター）が現れている。これでは国民党も民進党も中道に歩み寄るしかない。かくして生活に身近な話題が争点となり、たとえば「柿の値段が暴落した」ことで批判合戦が起きたりもした。政治課題の矮小化とも言えるが、これはむしろ台湾における民主主義の成熟と見るべきだろう。

ところで台湾の選挙は、中国からはどのように見られているのか。次期総書記と目されている習近平は、若い頃にアモイ市副市長、福建省長など台湾と関係の深い役職を歴任している。共産党大会を控えた微妙な時期に、中南海が

台湾の政治情勢に神経質になることは容易に想像がつく。

他方、台湾が民主的な選挙を行い、米国やロシアなども大統領選挙が相次ぐ二〇一二年後半になると、中国で新たに登場する総書記が「民意を得ていない」ことは嫌でも目を引くだろう。なにしろ世界で新しい指導者が多く誕生する中で、「中国と北朝鮮の二人の総書記だけは別モノ」になつてしまうのだ。すでに中国内部でも、ネット上には「台湾の民主主義がうらやましい」との書き込みが見られるとのことだ。経済的には台湾を呑み込まんばかりの中国だが、台湾の選挙は少しずつ中国の政治に風穴を開けるかもしれない。

台湾の選挙では不在者投票が許されず、投票日当日に各自の生まれ故郷で投票しなければならない。したがって、選挙のたびに民族大移動が起きる。それでも投票率は毎回高く、今回も八割に達した。つくづくレベルの高い民主主義なのである。「無党派層」を自認する蔡錫勳准教授（淡江大学日本研究所）は、「総統選挙はこれで五回目。政権交代も過去に二回やった。次はもうどっちが勝つても大丈夫」と語っていた。日本の政治情勢を思い浮かべて、思わず苦笑いしてしまった。今年中に解散・総選挙があった場合、次はどんな政権になつてしまうんだろう？ ■

双日総合研究所副所長・チーフエコノミスト

吉崎達彦

民主主義の成熟見せた

台湾総統選

二〇一二年に予定されている大型選挙のうち、先陣を切って台湾総統選挙が行われた。結果は馬英九總統の再選。

民進黨の蔡英文候補の得票は六%差で及ばなかった。

昨年一二月下旬、筆者は選挙戦取材のために台北市を訪れてみた。すでに市内の至るところに選挙看板が目につき、街頭演説車も走り回っていた。国民党本部は建物全体を巨大な看板と化し、「台湾加油」というスローガンを掲げていた。いわば「がんばろう日本」の台湾版である。しかも「加油」にひっかけて、馬英九總統がガソリンスタンドの店員に扮していた。エリート臭を批判された四年前とは大違いで、くだけた形でサービースに努めている。

民進黨本部は、パチンコ屋のような音を立てて小銭の集計を急いでいた。「志作人」（ボランティア）のバッジをつけた担当者に聞いたところ、全島の支持者から二〇万個の

よしざき たつひこ

一九六〇年生まれ。八四年一橋大学卒業、日商岩井入社。米フルッキングス研究所客員研究員、経済同友会代表幹事秘書・調査役などを経て企業エコノミストに。著書に「一九八五年」「オバマは世界を救えるか」など。ウェブサイトを「溜池通信」を主宰。

「ぶたの貯金箱」が寄せられたとのこと。資金力で劣る分を、小口献金で補う作戦である。

しかし四年前に目撃した選挙戦とはどこか調子が違う。はたと気づいたのは、「国民党は青、民進黨は緑」という従来のパターンが消えていたことだ。

国民党は青と赤と白の組み合わせで、まるで米大統領選挙のようであった。建国一〇〇周年を記念して、市内の至る所に青天白日旗が掲げているのだが、その旗の色合いを利用している。政府イベントとコラボするかのようだ。

民進黨側は、「台湾ネクスト」と書いた黄色の矢印をシンボルマークに使っていた。緑を使わないのは、「緑」独立派「陳水扁時代」のイメージから距離を置くためである。陳水扁前總統は汚職問題で今も刑事被告人の身であるし、無党派派を取り込むためには独立色を薄くしたほうがいい

い。ちょうど「鳩山・菅時代への反省から、慎重運転に努める野田首相」と重なって見えた。

「青か、緑か」という選択は、もともとは「統一か、独立か」を意味していた。だが、今となつては大陸との統一を望む人はほとんどおらず、かといって独立を求めることにも疲れてしまい、民意の八割は「現状維持」を求めている。米国で民主党と共和党の対立が深まっているのとは対照的に、台湾の二大政党は中道化路線を展開している。

考えてみれば、民主的な総統選は今回で五度目である。回数を重ねるにつれて、「前回は〇〇党だったが、今度は××党」という有権者（スウィング・ポーター）が現れている。これでは国民党も民進党も中道に歩み寄るしかない。かくして生活に身近な話題が争点となり、たとえば「柿の値段が暴落した」ことで批判合戦が起きたりもした。政治課題の矮小化とも言えるが、これはむしろ台湾における民主主義の成熟と見るべきだろう。

ところで台湾の選挙は、中国からはどのように見られているのか。次期総書記と目されている習近平は、若い頃にアモイ市副市長、福建省長など台湾と関係の深い役職を歴任している。共産党大会を控えた微妙な時期に、中南海が

台湾の政治情勢に神経質になることは容易に想像がつく。

他方、台湾が民主的な選挙を行い、米国やロシアなども大統領選挙が相次ぐ二〇一二年後半になると、中国で新たに登場する総書記が「民意を得ていない」ことは嫌でも目を引くだろう。なにしろ世界で新しい指導者が多く誕生する中で、「中国と北朝鮮の二人の総書記だけは別モノ」になつてしまうのだ。すでに中国内部でも、ネット上には「台湾の民主主義がうらやましい」との書き込みが見られるとのことだ。経済的には台湾を呑み込まんばかりの中国だが、台湾の選挙は少しずつ中国の政治に風穴を開けるかもしれない。

台湾の選挙では不在者投票が許されず、投票日当日に各自の生まれ故郷で投票しなければならない。したがって、選挙のたびに民族大移動が起きる。それでも投票率は毎回高く、今回も八割に達した。つくづくレベルの高い民主主義なのである。「無党派層」を自認する蔡錫勳准教授（淡江大学日本研究所）は、「総統選挙はこれで五回目。政権交代も過去に二回やった。次はもうどっちが勝つても大丈夫」と語っていた。日本の政治情勢を思い浮かべて、思わず苦笑いしてしまった。今年中に解散・総選挙があった場合、次はどんな政権になつてしまうんだろう？ ■